近世浄土宗本堂の研究（そのV）

仏堂型平面を基調にした安楽寺本堂 他

岡　野　　清

Study of Main Halls in Jyodo Sect in Edo Period (part V)

The Main Halls Planed according the Buddistic Hall Style, Anrakuji, etc.

Kiyoshi OKANO

During the middle and late Edo period, main halls of Jyodo sect especially in large and middle class temples increased the tendency to build them flashy and made a typical Buddistic pattern. This paper aimed to point up the process of thier growth standing on the results of restoration study.

近世に建立された浄土宗寺院本堂で大中型の規模のものが愛知県下には特に多く，又それが三河地方の平野部に多く存在している。徳川家の宗旨であった浄土宗寺院の中，徳川家にかかわる地方の寺院，菩提寺，人脈上の機縁やかっての功労があった家臣の関係寺院等には多くの庇護が与えられ，江戸時代初期には他の宗派を凌いで成長した。それらの本堂の多くは早くから装飾が派手になり，彩色が豊かになって，要所に三ツ葉葵の紋を光らせ，尊厳を誇って仏堂化する傾向が早くからあった。既に取扱ったように，岡崎市門前町の随念寺は家康の祖父とその妹のための創建で，元和5年（1619）に本堂が建立された。外廻りや外陣は末だ簡素な意匠であるが，几帳面取角柱，虹梁，連三斗つきの向拝の他，内陣まわりには円柱を廻らし，上部の頭貫，台輪上は挙鼻付出組斗栱，中備は蟇股とし，内陣天井は格天井と特に華やかにしている。か様な型の，内陣まわりを豪華に飾る傾向をもつ本堂の流れについて，本稿では採り上げた。

安楽寺本堂　　蒲郡市　清田町門前

応水年間に観学院を改宗して創立し，西山深草派に属する。永禄6年（1693）に徳川家康の義父久松長家が当地の領主となり，この寺を菩提寺としてから寺運隆盛に転じ，家康の母「於大の方」もこゝに在住したことがある。江戸時代初めから逐次諸堂を整え，現在蒲郡市街を見降す地に南面しているが，敷地も建物の規模も大型であり，長い参道から，総門，重層の山門，本堂，開山堂，位牌堂が一直線に並ぶ他，玄関，庫裡，書院，釈迦堂，鐘楼等を整えている。現本堂の建立は，寺の文書によると「……宝永七庚寅年會乎寺未檀度衆議一決而将建本堂……正徳二壬辰春始乎事巧同年秋復于旧観同八月七日落慶供養之式執行焉……」とあり，正徳2年（1712）の建立とみて様式的にも該当する。

本堂の結構は格調高く，重層門に調和するような極めて高い軒高の主屋部分の周囲に1間強の裳階を付し，1間の向拝を前面に付ける(図1)。屋根は桟瓦葺で妻飾り出組斗栱3ヶ所上に二重虹梁，両梁間彫刻蟇股入の入母屋造りで，上下層とも二軒繁棰，大棟端には鯱を載せている（写真1)。

現本堂の背後にある開山堂（23世瑞翁代天明～寛政建立）と位牌堂等後補された部分を除いて，堂内を痕跡によって復元すると，左右対称の仏堂としてすっきりしたものになる（図1．2)。

建立時の本堂は，外廻り正面中央間は双折扉，他は中敷居3本溝で戸2，障子1で戸締り，正側3方には濡縁を廻らす。堂内は前半を外陣とするが，この部分を広くとり，その周囲正側3面の1間幅の広縁を堂内に取り込み(この部分が裳階となる)，この広縁と外陣，脇間と位牌間との境（広縁内側）の柱間すべてには仏堂的に虹梁を架して建具はなくなり，正面中央間は一段上げて，虹梁上には丸彫の彫刻を入れる(写真2)，内陣は外陣中央へ突出した形になって周囲を檜材の円柱で囲い，その後部の両外側には位牌間と位牌壇を左右に配する（図2)。

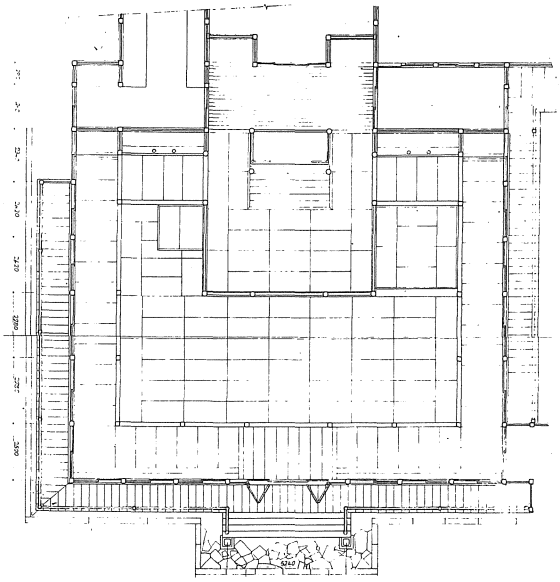

図 1　安楽寺本堂　現状平面図

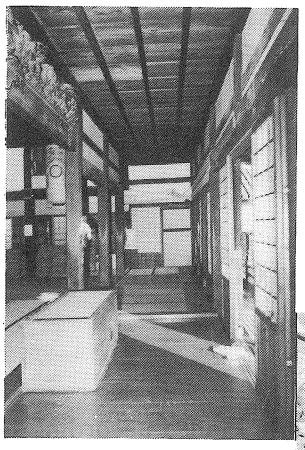

写真 2　安楽寺本堂前面広縁

写真 3　安楽寺本堂内陣前面

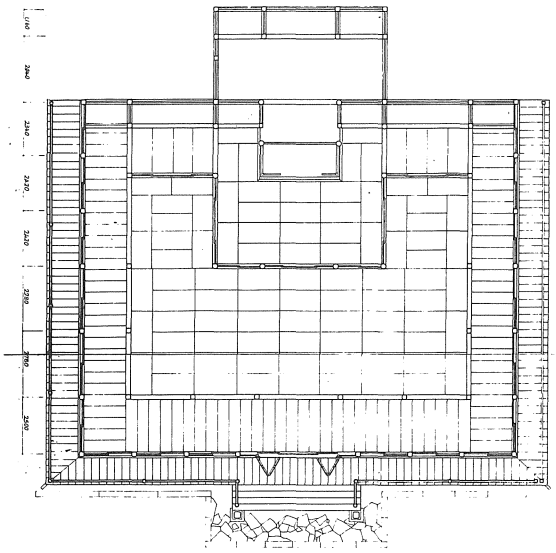

図 2　安楽寺本堂復元平面図

写真 4　安楽寺本堂西位牌間前

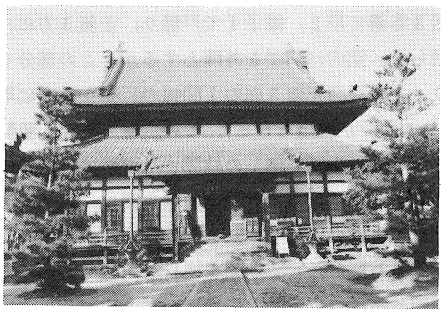

写真 1　安楽寺本堂全景

写真 5　安楽寺本堂内陣内部西面

前半の左右の脇間部分には外陣後部が入り込んでいるので脇間，外陣境はない。内陣周囲から位牌間前へかけて柱間に凸状に虹梁を架けて飾り，柱頂は粽付で，頭貫，台輪上には結組の出組斗栱を配し，この部分の柱上部から天井廻縁までを極彩色とし，欄間は内陣の前面は高肉透彫金泥塗，側面から位牌の間の前面にかけては透彫網目欄間を嵌める(写真３，４)。この部分の柱間には虹梁に相対して，下部に中敷居の結界框が嵌められ（両側面の後端１間は除く)，虹梁下に引違建具を入れた２本溝が残っていることからも外陣と内陣位牌間境は建具で仕切られていた(図２写真３)。内陣後端面に接している現来迎柱と唐様須弥壇は，もとは１間前進した位置にあった。現在須弥壇を囲んでいる四本の円柱の前側の２本がもとの来迎柱で，柱間にはもと来迎壁の取付いていた板決り跡があり，柱の前面には須弥壇の縁が取付いていた痕跡に埋木したことが打診によって認められるが，その位置

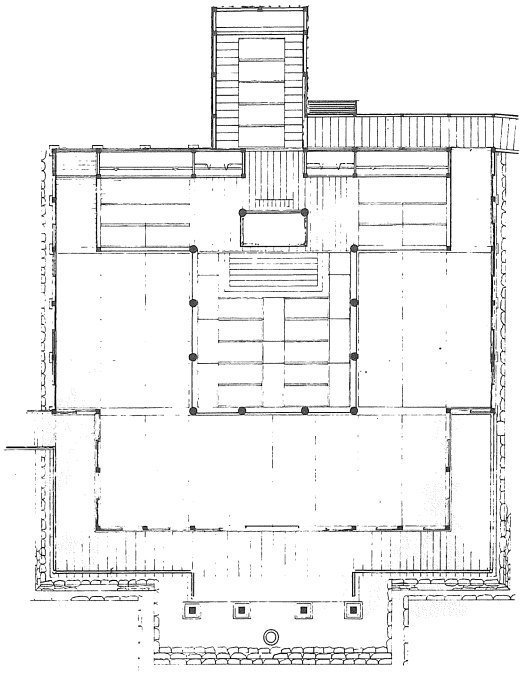

図３　法蔵寺本堂現状平面図

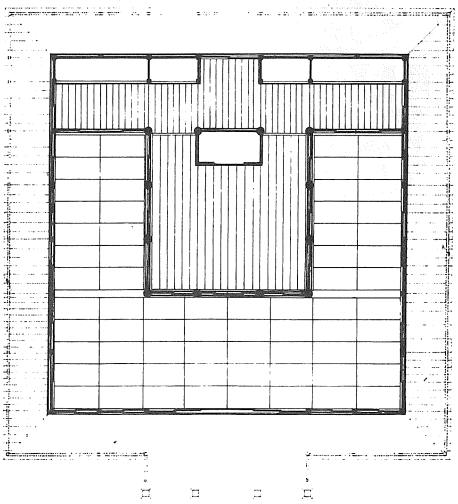

図４　法蔵寺本堂復原平面図

写真５　法蔵寺正（東）面

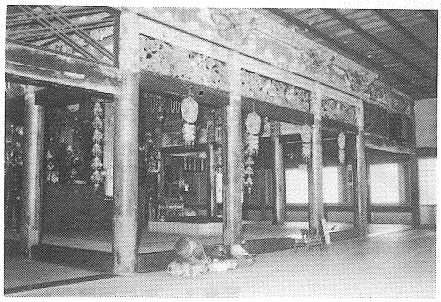

写真６　法蔵寺内陣，脇の間の前面

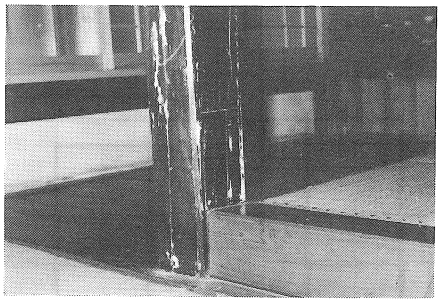

写真７　法蔵寺内陣まわりの結界取付跡と後補の上段框

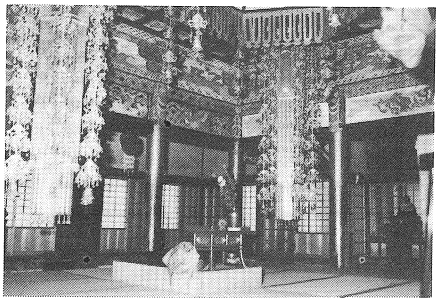

写真８　法蔵寺内陣内部見返り

が現須弥壇の高さより約30cm下にあることから，もとは内陣床が30cm下り，外陣と同高であった(現在内陣まわりにある結界框とその下の羽目板はそのまゝ残る)。天井は広縁は棹縁天井と簡素であるが(写真2)，外陣と脇間は格天井(写真3，4)であり，位牌間は絵入格天井，内陣は中央部分を折上格天井とした絵入格天井と言う豪華さである(写真5)。

法蔵寺本堂　　岡崎市本宿町

寺の由緒は古く，行基の創立と伝えるが，至徳2年(1330)浄土宗に改めた(西山深草派)。徳川家との関係が深く，東海道に面していて諸大名の通行をひどく悩ましたそうであるが，江戸時代に大いに発展し，棟札によると明暦年間の客殿を初め諸堂を整え，境内の一部には東照宮を祠っている。現本堂は棟札によると，享保17年(1732)の再建とある。明治頃に大改造したとき，両脇の間の側柱の柱列を，そのまゝ外側へ1間張出し，須弥壇と来迎柱を1間後退させた。そのときはもと堂の背面に並んでいた半間幅の仏壇をそのまゝ後退させて，内陣の奥行を深めている(図3，4)。このことについては現

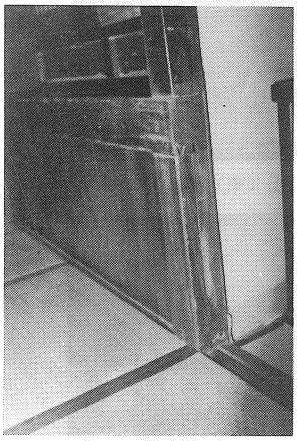

写真6　背面位牌壇の前框の切口

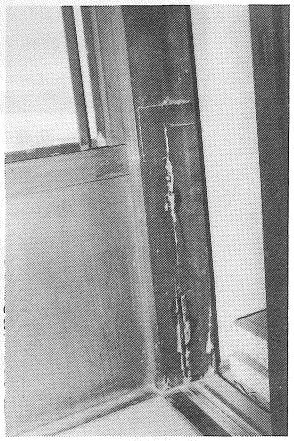

写真7　西位牌壇のもと前框取付跡

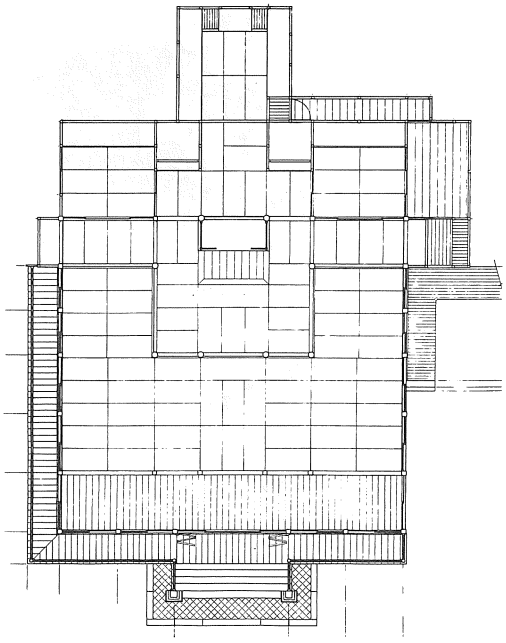

図5　松明院本堂現状図

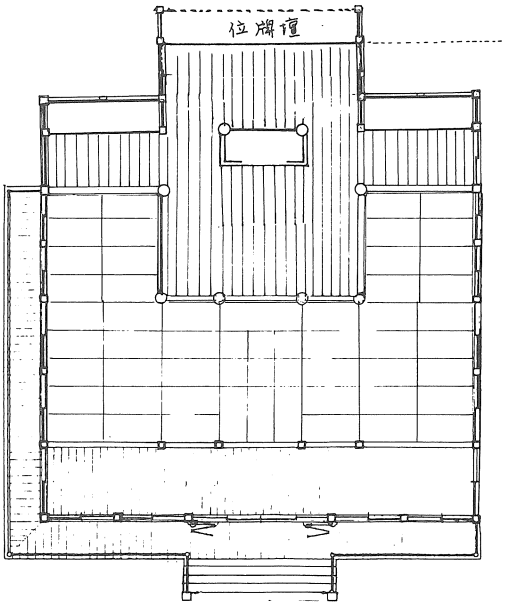

図6　松明院本堂復原図

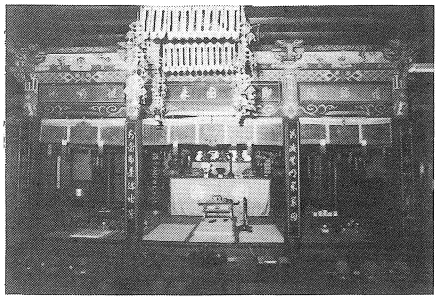

写真8　内陣前面

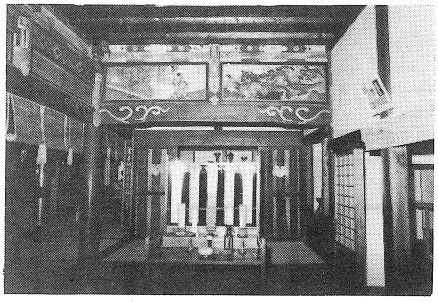

写真9　東位牌間前面

位牌間の奥行に使用する部材（９尺）が新材であり（もとの奥行は６尺），また堂の元の背面にかなりの風蝕があることからもわかる。このとき，脇の間位牌間境の通りにあった来迎柱も半間後退している。もとの来迎柱間に入れた頭貫の左右端が位牌の間前端の内側角の円柱に渡っていたものを，来迎柱と共に半間後退したために，内陣と位牌間境上に新たに架けた梁上に大瓶束を立てゝ来迎柱筋の頭貫をＴ字型に受けていることでもわかる。復原した平面は正方形となり，すっきりした形となって，この種の本堂の典型である（図４）。外陣の前，側方に廻らした１間幅の濡縁と，本堂後方へ突出した位牌堂（開山堂）は最初からの存在は確認出来なかった（図４）。

堂の外廻り周囲では中央正面入口は４間スパンと大きく，６枚戸の引違いであるが，他は中敷居３本溝で戸２，障子１で戸締った。堂内に広縁はなく，外陣は40帖の畳敷で，脇の間との境には無目敷居が入る。内陣廻りには円柱を廻らし，各柱間には，両側の位牌の間前にかけて型の如く中敷居結界を廻らし（現在は撤去，写真７），結界上は引違戸で戸締っていた（図４）。内法は旧態を保って内法貫を通し，頭貫，台輪を廻らし，柱上には唐様出組斗栱を内陣の内外側に見せている。中備なし。円柱は金箔置き，頭貫は黒漆塗，小壁から天井廻縁までは極彩色の仕上げで内陣の内外面を飾る（写真６，８）

内陣の正面の柱間３間の内法貫と頭貫間には特に透彫高肉彫欄間三枚を嵌めて荘厳し（写真６，８），その両脇の脇間の外陣境には斗栱の通りに板小壁を垂らし，小壁下には襷掛欄間各２枚を嵌めている（写真６）。天井は簡素で外陣，脇間，位牌間は棹縁天井（写真６），内陣は絵入格天井（写真８，中央部の折上は後補）。内陣と位牌間の床はもとは外陣と同高であったが，周囲の結界を撤去して框一段分上段とした床に現在は張直している（写真７）。

この寺の規模は境内，本堂とも中型であり，仏堂型として装飾程度は簡素な方で，年代の割には古式であるが，仏堂型としての平面の基本は失わない。二軒繋梠，屋根は入母屋造桟瓦葺。現在前面に３間の向拝が付されているが（写真５），当初からのものかどうかは確認出来ず，恐らく元は１間程度のものであったであろう。

松明院本堂　　岡崎市細川町

寺は応安元年に大給松平氏が創立したが，後，現在地に西方の護りの拠点として，矢作川に向って城郭を兼ねて築造したと言う。現本堂の建立は寺の過去帳によると「……元文六酉三月年号改元号寛保元年，四月三日柱立四日虹梁上ル，八日棟上，九日ヨリ葺下地ニ取掛リ，廿五日大工木挽終ル。大工千工，木引六百人，手間巣立金

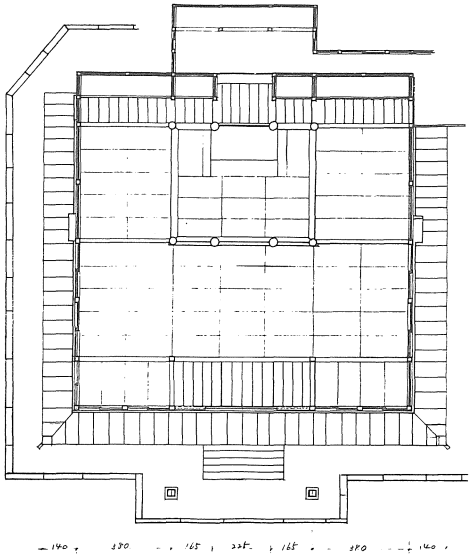

図７　崇運寺本堂現状平面図

三百両，当寺十三世底誉寿三十七……」とあり，様式的にみても妥当と思われる。現本堂は旧本堂を動かして現書院とした跡へ寛保元年（1741）に建立した。寄棟造，桟瓦葺で，前面に１間の向拝がつき，背面に角屋を出して位牌堂となっており，左右の後部に控室を設けた，浄土宗中型本堂の定型である（図５）。

復原すると後部の位牌堂や控室は新材であるのでもとはなくなり，もとの位牌壇は一直線になっており，現在の内陣裏１間後方の脇仏壇の前框（中央を切取って裏の位牌堂へ入るように改造された）がそのまゝ旧位牌壇であった（図６，写真６）。又，現在左右の位牌の間背面の襖間仕切の両端柱の相対する内側にはもとの位牌壇の框跡があることから現在背面両脇の控室に付されている位牌壇が９尺前進して付されていた（図６，写真７）ことが分る。

外廻りは正面は三折の桟唐戸を開き，周囲は中敷居で，３本溝で戸締り，正側３面に濡縁を付ける（図５）。堂内は，前面にのみ１間巾の広縁を取り込み，その奥を広い外陣が占める。外陣後部は内陣の両横を囲って脇の間となり，その奥に位牌の間（長４帖）が続く（図５）。

内陣が外陣に突出している部分は円柱粽付の柱を用い，虹梁，頭貫，台輪を廻らし，出三斗斗栱を載せて，中備なく，内陣の側面は１スパンなので虹梁中央に大瓶束を立て，位牌間正面には虹梁を架け，同様に大瓶束を立て，肘木の高さに貫を入れ，何れも虹梁上は板の壁（絵入）となり，虹梁は黒漆塗，絵様は金箔おき，小壁から上は極彩色で，内陣の内外面を華麗にしている。（写真８，９）。

この小壁の扱いについては内陣寄りの上部隅の斗横との嚙み会いが不自然であり，出三斗の真横に小壁の下貫や板欄間を押しつけたことになり，柱上粽もあって欄間が納っていないところをみても，もとは虹梁上は開放だったか，建造中に変更されたものと思われる（写真９）。広縁外陣境も中央間は内法を一段上げて大差鴨居を架し，その他は内法長押を通すが，建具は用いない。内陣まわりから位牌の間前にかけては型の通り敷居状の上段框を付けて下に羽目板を入れ，床高を框上端まで上げているが，もとは内陣，位牌間の床も板張りであった。天井は広縁，外陣，脇の間，位牌間は棹縁，内陣は析上格天井である。内陣と位牌間の床高については，床下に床が外陣と同一面に下っていたと思われる仕口も見受けるが，内陣柱廻りには他寺の古い例の様に中敷居結界框もなく，その上部は虹梁で，建具も当初から存在せず，内陣廻り，位牌壇前は開放に造られるので，床も一段上った新型の過渡期のものであったと見た方がよく，この期を境にこの地方では新型の内陣の扱いとなっていたと考えたい。

崇運寺本堂　　一色町佐久島　西山深草派

この本堂が建造されたのは様式的にみて幕末と思われるが，以来改造も殆んどなく，内陣，位牌の間の床が最初から上階になっている他は前掲の諸例と総じて一致しており，当時の典型的平面がわかる（図７）。この堂は前掲の諸寺が建立以来諸般の要請によって増築改造されてきたので，各々復元考察することによって当初の原型を探って究明したのに対し，現状平面のまゝそれらの復元結果とほぼ合致するので，あえて徳川家にかわりなくここに掲げた。

結び

今回取上げたものは，何れも愛知県下の大中型の徳川家とかかわりのある寺で，仏堂型本堂の主要なものである。他にも江戸初期のもので，名古屋の相応寺本堂（寛永12年1635）や超大型の本堂である建中寺本堂（天明７年1787）等が存在するが，平面は何れもほぼ正方形で，入母屋造 向拝付。大型のものは四面乃至三面に広縁を取込み（中型以下は前面のみ），およそ前半分を占めた広い外陣と脇の間で内陣の前側面を囲い，内陣まわりから位牌間前へ折れた円柱の柱間に中敷居の結界や虹梁を廻らして，この部分を特に装飾華やかに荘厳する。古い型では脇の間，外陣境も建具で仕切り，内陣，位牌間前の結界框上も建具で戸締っていたが，時代が降るにつれて虹梁を入れ開放されるとともに，その部分の床高が上げられて内陣の尊厳を保つ型に定着したのである。

（受理　昭和56年１月16日）